



## Recidivism of Japanese offenders

著者	遊間 義一
内容記述	Thesis (Ph. D. in Policy and Planning Sciences)--University of Tsukuba, (A), no. 4939, 2009.3.25 Includes bibliographical references (leaves 108-118)
発行年	2009
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/111282">http://hdl.handle.net/2241/111282</a>

【125】

氏 名（本籍）	ゆう ま よし かず 遊 間 義 一（東 京 都）		
学 位 の 種 類	博 士（社会工学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4939 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	システム情報工学研究科		
学 位 論 文 題 目	<b>Recidivism of Japanese Offenders</b> (日本の犯罪者の再犯)		
主 査	筑波大学教授	Ph. D. (社会学)	松 田 紀 之
副 査	筑波大学准教授	Ph. D. (組織行動論)	渡 辺 真一郎
副 査	筑波大学教授	Ph. D. (経済学)	浅 野 哲
副 査	筑波大学教授	博士 (学術)	庄 司 功
副 査	筑波大学教授	Ph. D. (統計学)	金 澤 雄一郎

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本における犯罪者の再犯（再び犯罪を行うこと）要因について検証したものである。第一章では、論文全体の概観及び日本の刑事司法制度の説明を行い、第二章及び第三章では、矯正処遇の効果について、生存分析の手法を用いて検討している。第四章は、成人の再犯に影響を与える要因について、社会環境、特に経済変動の要因について、時系列分析の手法を用いて検討を加えたものである。

第二章では、少年鑑別所に入所した少年のその後の再度の少年鑑別所への入所に影響を与える要因について、生存分析の一手法であるコックスの比例ハザード・モデルを用いて分析を行っている。第三章では、第二章の一部のデータセットを用い、第二章で用いたコックスの比例ハザード・モデルの“すべてのものは、必ず再犯をする”という前提を必要としない母集団分割生存分析を用いた上で、さらに、少年院処遇をその内容によって三つに分けて、非行少年の再犯要因及び少年院等の処遇効果をより詳細に検討している。

第四章では、刑務所出所者の再犯に対する経済変動の影響を、時系列分析の手法を用いて検討を加えている。第二章や第三章とは異なり、対象者を少年ではなく成人としたのは、成人の場合は、少年のようにデータの切断の問題が存在しないために、時系列分析による推定が可能となるからである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

第二章では、非行少年の集団を初回か二回目および早発か遅発の 4 つに分け、それぞれの集団における特徴を描き出し、社会的なきずなや少年院送致・保護観察といった処遇への反応がかなり異なることを明らかにした。これは今後の少年司法を考える上で意味のあるものとなった。第三章では初回で遅発型の非行少年の集団に焦点を絞り、比較的に犯罪なれしていないこの集団においては再犯を起こさない部分集団の存在を認めたとうえで、それにあったモデルを当てはめ、処遇についても少年院処遇をより細かく分けることによって非行少年の再犯要因や処遇効果を調べ、重要な知見を得ている。第四章は、将来的に少年の再犯に対する

社全的要因を検討するための第一歩として位置づけられる一方、これまで日本ではほとんど行われてこなかった成人の犯罪者の再犯要因の研究の第一歩にもなりうるものであると評価できる。

よって、著者は博士（社会工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。